

メロン黄化症の発症時期および発症分布

近年問題となっているメロン黄化症は定植して2週間目頃から発症が始まり、メロンの交配後1ヶ月頃まで発症株は増加し続けるが、それ以降はほとんど増加しない。また、黄化症の発生にはタバココナジラミバイオタイプQのメロン交配までの関与が大きいことが示唆された。

農業研究センター 農産園芸研究所野菜研究室 (担当者: 林田慎一)
生産環境研究所病害虫研究室 (担当者: 行徳 裕)

研究のねらい

平成16年頃から広範囲のメロンほ場において葉の黄化症状が発生し、果実肥大や果実品質に影響を及ぼしているが、「農業の新しい技術(第20号)」でタバココナジラミバイオタイプQによる加害がメロン黄化症の原因であることが報告された。ここでは、黄化症の発症時期や発症株のほ場内分布を明らかにするため、7月播種および8月播種の作型について、現地ほ場における黄化症状の発症状況を調査した。

研究の成果

1. 調査を行った現地ほ場の5カ所全てでタバココナジラミバイオタイプQの発生と黄化症発症株が確認された。また、黄化症発症株率はほ場間で差が見られた。(図1)。
2. 黄化症発症株は定植して約2週間後から交配約1ヶ月後まで増加し続けた(図1)。
3. 黄化症はハウスの棟数や栽培時期に関係なくハウスサイドや谷開口部で多く、棟の中央部で少ない傾向が見られた。中でもハウスサイドの開閉が多い7月播種作型では両ハウスサイドで特に多発する傾向が見られた(図2)。
4. 黄化症の発症にはタバココナジラミバイオタイプQの交配期までの寄生が大きく影響することが示唆された(図3)。

普及上の留意点

1. 黄化症による被害を防ぐためには、耕種的防除や薬剤防除で交配後1ヶ月までの発症を抑えることが重要である。
2. コナジラミ防除時には特にハウス開口部に散布ムラがないよう留意する。
3. メロン黄化症の症状は、従来発生していたメロン黄化葉症と区別することはできない。

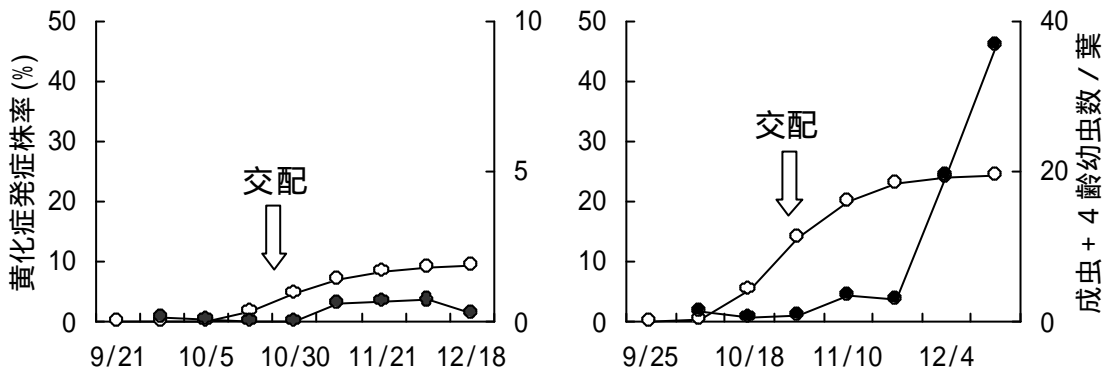
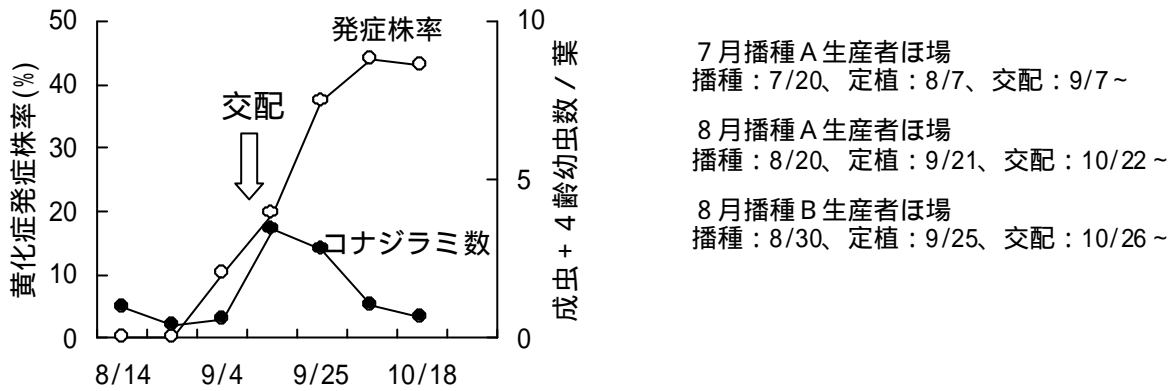


図1 現地ほ場における黄化症の時期別発症株率 () とタバココナジラミ数 () の推移

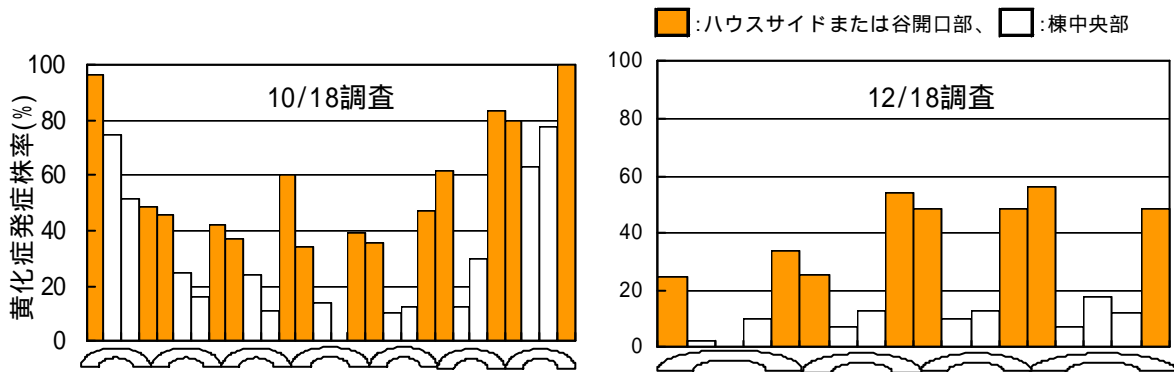


図2 現地ほ場における黄化症の畝別発症株率
左図：7月播種A生産者ほ場（7連棟）、右図：8月播種B生産者ほ場（4連棟）

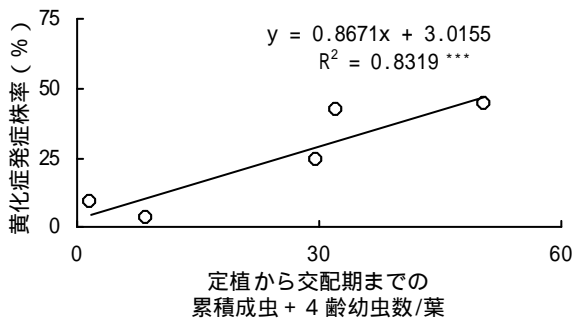


図3 現地ほ場における交配期までの累積タバココナジラミ数と黄化症発症株率との関係